

Title	いかに心の世界を学ぶか（カウンセリング研究センターシンポジウム）
Author(s)	越智, 裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.3 : 17-19
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3540
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

いかに心の世界を学ぶか

2011年7月1日、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センターの講演会が開催された。

最近では心の時代だと言われているが、ここは目に見えず、奥が深く、分析や解析することが難しい。そのため本講演会では、「いかに心の世界を学ぶか」というテーマで、各専門領域のスペシャリストであり、本学の教員でもある3名の先生方に実践報告も含め講演をしていただいた。聖学院大学大学院教授、精神科医 平山正実氏、同じく本学大学院教授 窪寺俊之氏、本学大学院准教授で、臨床心理士の藤掛明氏である。以下、3名の講演内容を順次、報告していきたい。

1. いかに死生学を学ぶか

聖学院大学大学院 平山正実教授

平山教授は、彼自身が現在3つの肉体的トゲを持つ経験をしており（具体的には言明されなかった）、聴講者にそれを説明した上で「自分の問題として死生学をとりあげる」と、一人称の死について取り扱うことを提言した。

1) 今後の人生における優先順位の確定

A) 身体・心理・社会・スピリチュアルなレベル：死に対するイマジネーションを持つことが重要で、死というものを考える場合には、人生に対する優先順位は何なのかを決めることが大切である。死を考え、残された時間をどう使うのか、毎日の生活の中で、人生の座標軸において自分がどこにいるのかを理解する必要がある。B) リビング・ウィルなどの自分の死についての意志伝達：死をきちんと考えておくことのメリットとして、自分の存在を過去から未来へと考えることがある。例えばリビング・ウィルは自分の未来に対する予告であり、財産の問題、人間関係の和解、信仰の問題などについて書き記すことである。それは、自分の未来にかかわると同時に、未来の人々にどう伝えていくかといった内容も含まれる。重要なのは、死に逝く人が、自分の死をデザインできることである。

2) 病気や死に直面した時、どう支え、どう支えられるか

理性として死を学ぶことにより、自分の問題として死のよりどころを、どこにおくのが問題になる。旧約聖書から、死の間際になっても王の指導をし続けたエリシャの例を挙げ、たとえ病気になってもめげずに、自分の職務を全うする態度が評価される。

次にとりあげたのがサバイバー・ギルトについてである。サバイバーは生き残りを意味し、サバイバーが「ああすればよかった、こうしておけば…」と生前の態度を後悔することがサバイバー・ギルトである。特に家族に自死者があるサバイバーの中には、自身を追い詰め、後追い自殺をする者もいる。このギルトの問題は、正常な心理であるが、それをどう乗り越えるかが問題になる。それでうつ状態になる人は少なくない。そのため、それを逆手にとり、将来、後悔を感じるであろうことを、今から備え、後悔のないようにかかわることが重要であるとしている。

3) キリスト教死生学の課題について

A) 自己と他者との和解の問題：旧約聖書の中から、ダビデをとりあげ、彼が息子の死をきっかけに自分の行いを悔い改め、赦しを受けた例が示された。しかし、このギルトの問題に対しては、キリスト教死生学の中で、もう少し検討する必要性についても言及した。

B) 神義論の問題：震災もそうであるが、病気や死がなぜ自分に訪れるのかという問いは人間の理性では答えられないことである。一方では、人間は自分の人生の意味を考えることができ、死と宗教は深く結びついている。私たちはもっと死と人生の意味について考える必要がある。

3) 生命倫理上の諸問題

死生学の研究の中核をなすのは、認識論、科学論である。生命倫理の問題の認識では科学論を用いている。しかし、死生学の生命倫理の問題には、

科学の中のみで解決ができないことがある。人格はペルソナという言葉からきており、対応する、向きあうという意味である。生命倫理を研究するためには、共感性をもつ人格論と、真実を追求する科学的認識論との複眼的な視点の導入が望まれる。合理的、客観的にみる視点、関係性の中でみる視点、この両方の視点をもつことが必要である。死生学の問題にもこの両方の視点が必要になる。

2. いかにスピリチュアル・ケアを学ぶか

聖学院大学大学院教授 窪寺俊之

窪寺教授は、何がスピリチュアル・ケアであるか探求するには、まず、定義を明らかにする必要があると言及した。その定義は「人間をどうみるかということに関ってくる」と考えている。

1) 心の世界について

心の世界には、学際的な理解が必要になる。①心理学的理解（機能的理解、思考、感覚、感情、意志）、②社会学的理解（群集心理、社会心理）、③宗教的理解（神仏を求める、救済、永遠に生きる願望）、最後に④スピリチュアルな理解（究極的存在への希求、存在の土台、生きる枠組み）がある。特に、③と④について論じた。

③の理解は、人間が神をもとめることにある。特に困難があると、救われたいと思い、何か自分を越えたものに救いを求めようとする。その態度は誰もが持っており、それを理解しようすることにスピリチュアルが関わる。④の理解は、例えば宗教嫌いの者でも、人間は何のために生きているのか、抱えている困難の意味は何であるのか、存在の土台や根底、生きるための枠組みを問いながら生きている。これらの心理的・精神的領域、社会的領域、宗教的領域、スピリチュアルな領域は、どこかでオーバーラップしながら存在している。

2) 終末期がん患者の生き方の特徴について

①生きる目的を問う：すべての人が宗教を求めているが、人間の力では解決できないこともある。特に、死後の命を考えた時、また、罪責感な

どにおいても宗教的な理解が関わる。しかし、宗教に批判的とまでいわなくても懐疑的な文化状況にあるときは、宗教への拒否的態度がある。終末期の段階ではこれが大きな問題となる。健康な時にはそれほど切実には思わないものに直面する問題である。宗教に懐疑的な人にスピリチュアル・ケアという概念が有効とされる。特に終末期のガン患者へのケアにである。この領域のケアは文化圏によって違う。キリスト教が強いと宗教的な解決がなされるが、現代では医療技術が発達し、長寿が実現しているので、実はほとんどの国でスピリチュアルについて考える必要が出てきている。特に、看護、介護、教育領域で大きな課題になってきている。体が不自由な中生きていて「何のために生きているのか」と切実に思い「早くお迎えが来ればいいのに」「こんな体は辛いので早く逝かせてほしい」と思うようになる。そういう彼らにケアをすることが必要とされる。つまりその人がその人らしく、生きる意味を見出し、その中で生きることができるようケアが求められる。

②苦悩の意味を問う：例えば、私という人間がいる。そして、その周りには周囲の者がいる。我々は横の関係の中で生きている。一方、死の問題に直面すると、「自分はどこに行くのでしょうか」と周囲の者に尋ねてもほとんどの者が答えてくれない。

非常に強い罪責感を持っていると、自分の人生はこれで良かったのか、自分の人生を総決算しなければならなくなったときに罪責感、悔いる、反省する、などを経験する。中には横の関係（周囲の者）では解決できず、縦の関係（神）が必要になる者もいる。神からの赦しが必要になり、その赦しを求めているのである。

③不安、恐怖感をもつ、死後のいのちへの願望：ここでは、あるホスピスのガン患者の例が挙げられた。わがままで、毎日尽くす妻に感謝の気持ちを告げたことがなかった彼は、ある日、「先生、私だめだと思います」「聖書を読みたい」な

どといった。彼に聖書を持って行き、置いておくと、その患者が「聖書って面白いですね」と言った。次の日には、朝昼の宗教放送も聴いていた。そして、「自分はクリスチャンになりたい」と言いだした。そこで「イエスを心に受け入れればクリスチャンになれます」と言い、その患者の手をとり導いた。次の日には、洗礼式をした。しばらくして、その患者の意識がもうろうとなった時に、「先生、私はだめだ、天国に行く、先生が天国に行った時に一番良い席を用意しておくから」といった。その時、やっとその人が自分の死を語る自由が与えられた。十字架に自分の人生を預けることで、自分の人生を全部任せ、自分がどこに行くのか見つかったと考えた。そして、ついにその患者は、彼の妻にも「ありがとう」と言えた。ここでは神との縦の繋がりができ、最後に周囲との横の繋がりができた例として紹介された。

3. いかにカウンセリングを学ぶか

聖学院大学大学院准教授 藤掛 明

1) カウンセリングで扱う「心」と「魂」の世界——カウンセリングで死の問題、宗教の問題を扱い得るのか——

かつて、フロイトは「宗教を心のアヘンだ」と言って批判をしていたが、現在は宗教とカウンセリングは関係があるものと考えられている。特に、ユング派の河合隼雄は、死後の世界などを取り扱う時には、カウンセラーに宗教性が必要だと語っているし、賀来周一も、カウンセリングの立場から、キリスト教の価値や意味を扱っている。このように、キリスト教とカウンセリングは共に扱うことができる。

2) 臨床の「知」というスタート地点

臨床の「知」には、3つの観点が重要であるが、その一つが、「相互作用性」である。近代科学の客観主義に相対する原理で、これは行為する当人と、それを見る相手やそこに立ち会う相手との間に相互作用が成立しているとする立場である。

臨床知というのは、相互作用性として、近代科学で扱えなかった問題を扱っている。例えば、患者の夢を尋ねて問題を解き明かす夢分析では、魂の深い流れにそっていく。この夢分析には様々な学派があり、例えば、フロイト、ユング、アドラーらがいるが、ユング派の医者が夢分析すると、患者がユング好みの夢をみはじめる。これは患者が治療者の影響を受け、二人で一緒に夢をみている相互作用性の例である。カウンセリングや魂の世界を考える場合には相互作用性がありえる。また、それが重要である。

カウンセリングを学ぶときには、①個人かシステムかで異なる。他にも、②アセスメントか治療か、③学問か理論か、という相反するものがある。これらのどちらも大切で、両方を学ぶことがよいのである。

カウンセリング全体を考えると、カウンセリングをするときには、人生全体にかかわる視点、職場や家庭のトピックスで見る視点、人生の危機として見る視点などが必要である。人生の未解決問題が統合されていくとの見方をすればよい。生活問題を抱える人がいれば、カウンセリングを学ぶことから、その問題を視野に入れて心理ケアをすることができる。他にも、決めた場所や時間で実施する治療契約などがあるが、治療契約を結ぶメリットを加味し、崩すときにはそれが崩れてしまうことを理解する必要がある。そして、カウンセリングを勉強する人は、学び合うこと、学習者同士で語り合うことが必要で、それが大きな原動力になる。

以上、「いかに心の世界を学ぶか」とのテーマで3名のスペシャリストを招いて行われた講演会は会場にあふれる参加者を得て、盛会であった。

(文責： 越智裕子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

*37ページのアンケート集計結果もご覧ください。